

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農薬使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 野菜

発行日 平成24年 9月27日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用QRコード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 台風対策 排水対策と施設の保守点検を万全に
- ◆ 露地きゅうり 重要病害に対する防除の徹底
- ◆ 雨よけトマト 保温の徹底と裂果の発生防止
- ◆ ほうれんそう 適切な温度管理と病害虫防除の徹底
適期は種と適切な温度管理による品質向上 (寒締めほうれんそう)

1 生育概況

- (1) 7月以降の少雨、高温の影響により、全般に草勢の低下や生育抑制が見られるほか、害虫が多発傾向です。ここ数日の降雨により、病害の発生も増加傾向にあります。
- (2) 露地きゅうりは、収穫終盤となっているものの、適宜かん水を行っている圃場では草勢も良い状態を保っています。8月下旬以降、褐斑病等の発生が多いほか、枯れ病も例年に比べて発生が多く、枯れ上がる圃場も散見されます。
- (3) 雨よけトマトは、8~9月の高温で収穫が一気に進み、かつてない収穫ピークとなりました。気温低下とともに裂果の発生が増加しており、出荷量は減少傾向です。全般にオオタバコガの被害がみられています。
- (4) ハウスピーマンは、気温低下に伴い果実肥大が遅れる傾向にあり、露地ピーマンでは、草勢の低下、果実肥大の遅れがみられ赤果の発生が目立っています。タバコガの被害が、依然みられています。
- (5) 雨よけほうれんそうは、8月以降の高温により生育停滞やしおれ、枯死が見られます。ハウレンソウケナガコナダニ、アブラムシ類、シロオビノメイガの発生が見られます。
- (6) ねぎは、収穫が継続して行われていますが、乾燥の影響で例年より細い傾向です。黒斑病、アザミウマ類が多発している地域があります。
- (7) キャベツは高温少雨で小玉傾向でしたが、その後の降雨で回復しています。病害虫ではべと病が多くなっています。レタスの生育は順調で1週間程度早まっています。病害虫は少雨により少なくなっています。

2 技術対策

(1) 台風対策

台風18号が接近しています。状況に応じて排水対策、施設の保守点検など、事前事後対策を徹底してください。技術内容の詳細については、H24.6.19発行の「号外 台風対策」を参照してください。

(2) 露地きゅうり

今後は、気温も低下してくることから強い摘心は控え、アーチから飛び出した弱い芯を指先で摘む程度に止めます。摘葉は病葉・古葉・黄化葉等を中心に行い、草勢維持を図りましょう。

8月下旬以降、褐斑病の発生圃場が非常に多くなっています。多発圃場では、収穫残さや支柱、番線、かん水チューブなどに付着した病原菌が翌年の発生源となりますので、栽培終了後は速やか

に残さの片づけや資材の消毒を実施しましょう。

また、本年度株が急に萎れる症状が見られた圃場では、片づける前に根を引き抜いて表面にホモプシス根腐病による黒変症状がないか確認しましょう。疑わしい症状が見られた場合や、次年度の作付けに不安がある場合は最寄りの指導機関に連絡し、残さ検診を受けることをお勧めします。

(2) 雨よけトマト

極端に気温が低下した影響で、裂果の発生が増加しています。

今後、さらに発生しやすい環境が続くことから、夜間の保温に留意してください。この際、ハウスの密閉により湿度が高くなり、葉かび病や灰色かび病がしやすくなるので、防除の徹底に努めてください。

また、裂果の発生軽減技術として全摘葉処理が有効です。全摘葉処理の方法は、9月末から10月初めまでの間に写真のように葉を全て摘んだ後、霜が降りる前につる下げし、不織布をべたがけします。低温や霜の影響が回避され、収穫可能な果実が増加するとともに、裂果の発生を減らすことができます。

(3) ピーマン

雨よけ栽培では、夜間の保温により生育温度の確保に努めましょう。

全体的に赤果やひび割れ果の発生が増えています。特に下り枝に着果している果実は早めに除去し、草勢維持と早期収穫に努めて下さい。また、露地栽培では、斑点病の発生と腐敗果の増加のおそれがありますので、降雨前後にはカスミンボルドー等の散布により発生低減を図りましょう。

(4) 雨よけほうれんそう

年内収穫のためには種をもう1作検討しましょう。低温伸長性のよい品種を選択し、ハウスの開け閉めなどによる温度管理を適切に行い、年内に確実に収穫できるようにしましょう。

ハウスを閉める時間が長くなると、べと病の発生も多くなります。べと病抵抗性品種を利用している場合であっても、日中は積極的に換気して、病害が発生しにくい条件にするとともに、殺菌剤の予防散布も行ってください。

ホウレンソウケナガコナダニによる被害が多くなる時期です。近年は夏期にも被害が見られるほ場もあり、発生が周年化しています。今年被害があった圃場では、早期に殺虫剤の散布を行いましょう。農薬散布は薬液が心葉まで届くように丁寧に行いましょう。また、今年もシロオビノメイガの食害が広く見られます。幼虫は最初、心葉の隙間に入り込んでいるため見つけにくいので、注意して観察し、防除が遅れないようにしましょう。

作付け終了後は、来年の施肥管理の適正化のために、土壌診断を受けましょう。

(5) 露地葉茎根菜類

ア ねぎ

最終土寄せから収穫までの日数が長くなりすぎると、品質の低下につながりますので、気象情報を参考にして計画的な作業に努めましょう。



写真1 ホモプシス根腐病による根の状態
(左上：黒変症状 右：200倍に拡大)



写真2 全摘葉処理を行うことで、裂果の発生を防ぎ収穫可能な果実が増加する。時期は9月下旬～10月初めまでとする



写真3 シロオビノメイガによる食害 (矢印の部分に幼虫がいます)

病害の発生が多い傾向ですが、農薬散布は収穫前日数に注意して適正に行いましょう。

イ キャベツ・レタス

県北高冷地の収穫は終盤です。作付け終了後のマルチ、残渣の処理を適切に行いましょう。病害により収穫できなかったものは早めに処理して、被害が蔓延しないように注意しましょう。

来年に向けて土壌診断の実施や堆肥施用による土づくりに努めましょう。

(6) 冬春野菜

ア 寒締めほうれんそう

ハウス栽培では 10 月中旬までが播種時期です。品種の特性に合わせ適期に播種し、次のことに留意して管理しましょう。

保温のし過ぎで生育が進むと、十分な低温に遭遇する前に収穫サイズに達してしまう一方、温度が低すぎると収穫サイズに達しないまま冬を越してしまいます。本県の寒締めほうれんそうの出荷期間は 12 月～翌 2 月が基本ですので、ほうれんそうの生育状況に応じて、適切な温度管理を行いましょう。詳しくは平成 17 年度試験研究成果「寒締めほうれんそうの作期判定と生育調節技術」を参照して下さい。

冬期間は、大雪の影響でパイプハウスが倒壊する場合があります。寒締めほうれんそうを作付けするハウスは 1 棟おきにして、作付けしないハウスはビニールを外す等、除雪しやすいようにしましょう。

イ 伏せ込み促成アスパラガス

気温の低下とともに、地下部への養分転流が進む時期です。地上部が自然に黄化して枯れ上がるようにするため、台風による倒伏などで、茎葉が傷むことがないようにしましょう。

本年度も気温は高めに経過する見込みです。根株の無理な早掘りは収量の低下につながりますので、5℃以下の遭遇時間を参考にするなど、適切な時期の掘り上げを心がけましょう（平成 18 年度試験研究成果「アスパラガス年内どり作型における 1 年養成根株の掘り取り時期」参照）。

農作物技術情報第 8 号は 10 月 25 日（木）発行の予定です。
気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9 月 15 日～11 月 15 日は秋の農作業安全月間

農作業 笑顔の豊作 無事故から

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。